

第38回 三重歯科・口腔外科学会抄録

The 38th Mie Meeting of Dentistry and Oral Surgery, Abstracts

日 時：平成22年12月18日

場 所：三重県口腔保健センター

1. 悪性黒色腫 PMP MMN9 細胞での Cationic Liposome を用いた Bax mRNA 導入による抗腫瘍効果 ~caspase-3 活性と apoptosis の誘導についての検討~

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

国立病院機構 三重病院 歯科口腔外科*

○ 竹岡高志*, 奥村健哉, 乾真登可, 田川俊郎

Bax は Caspase-3 を活性化し Apoptosis を誘導する。一方, plasmid から mRNA に替えて導入させることにより高い導入効率が期待できる。そこで, 悪性黒色腫 PMP, MMN9 細胞に対して Bax mRNA の導入を行い, 抗腫瘍効果について検討を行った。【材料】細胞:PMP, MMN9; ヒト口腔悪性黒色腫細胞株, Liposome:DOPE と DOTAP により作製。Bax plasmid:pcDNA 3.1(+)-Bax. Bax mRNA:Bax plasmid より作製。【方法】導入効率測定は GFP-assay, Bax タンパク発現は Western Blotting, Caspase-3 活性は Colorimetric assay, Apoptosis は TUNEL assay で評価。【結果】mRNA の導入効率は PMP では 80.7% で plasmid の約 2 倍, MMN9 は 70.4% で plasmid の約 2.7 倍に向上した。Bax mRNA の導入により Bax タンパク発現はさらに増強し, Caspase-3 活性は PMP, MMN9 とともに Bax plasmid の約 1.23 倍に上昇した。Apoptosis は PMP で 32.8%, MMN9 で 50.2% を占めており, それぞれ plasmid の約 2.0 倍, 約 2.8 倍であった。【考察】本療法は悪性黒色腫細胞に対して, Caspase-3 の活性化により Apoptosis を多く誘導させており, 従来 of plasmid を用いた遺伝子療法より高い抗腫瘍効果が期待できる。

2. ヒト口腔悪性黒色腫 PMP 細胞での PDE2 スプライシングバリエントの解析

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 森田 寛, 清水香澄, 関田素子, 村田 琢, 田川俊郎

【目的】phosphodiesterase (PDE) は, 細胞内のセカンドメッセンジャーである cAMP や cGMP を分解し, 様々な生理作用を調節している。以前われわれはヒト口蓋悪性黒色腫由来 PMP 細胞 (PMP) で, PDE2 阻害剤が増殖と浸潤を抑制し, 3 種類ある PDE2A バリエントのうち PDE2A2 のみが発現していることを報告した。したがって PDE2A2 バリエントを選択的に阻害できれば, 新薬を開発できる可能性がある。そこで今回は PDE2A2 バリエントについて検討した。【材料および方法】当教室で樹立継代している PMP に発現する PDE2A2 タンパク質をウェスタンブロットで検討した。また, cGMP 濃度による PDE2A 活性の変化と, cGMP が結合する GAF-B ドメインのシークエンスを行った。【結果および考察】ウェスタンブロットでは, PDE2A2 と一致するサイズのバンドを 1 本認めた。cGMP 濃度による PDE2A 活性の変化は正常細胞と同様であった。GAF-B ドメインに遺伝子の変異はなかった。今後は PDE2A2 のタンパク質コード領域全体における遺伝子の変異をさらに調べていく予定である。

3. 当院における歯科衛生士と看護師による口腔ケアの取り組み

済生会松阪総合病院 歯科口腔外科

- 田中千賀, 稲垣奈央子, 福山結香,
岸田奈緒子, 近田紀子, 上田早苗,
田中美智子, 鈴木康昭, 上田貴史,
佐藤耕一

【はじめに】平成19年から歯科衛生士による専門的口腔ケアを開始したが、患者数が年々増加し、十分な回数の専門的口腔ケアの実施が困難になった。そこで平成21年8月からは歯科衛生士と看護師による口腔ケアを開始した。当院での口腔ケア活動について報告する。【方法】口腔ケアの患者数、病棟別件数、実施頻度を、看護師と歯科衛生士での口腔ケアを開始した平成21年8月以前と以降で比較検討した。【結果】平成19年度は患者1人当たりの口腔ケア実施頻度は5.5回/月、平成20年度は2.5回/月であった。平成21年度の4月～7月は2.9回/月であったが、歯科衛生士と看護師で行った8月～3月は3.6回/月と増加した。口腔ケアの件数は脳外科・神経内科病棟、内科病棟、外科・口腔外科病棟の順に多く、病棟別の割合に変化はなかった。【考察】看護師の協力により、口腔ケア実施頻度が増加した。看護師と歯科衛生士の間で全身状態と口腔環境の情報交換ができ、担当看護師の存在で、患者が口腔ケアに協力的になるといった利点があった。看護師が専門的口腔ケアの重要性をさらに認識し、本年8月からは、上部消化管手術患者の口腔ケアの取り組みが始まった。

4. 松阪市民病院における口腔ケアの取り組み 第2報 看護師と歯科衛生士の連携

松阪市民病院 歯科口腔外科

- 宮崎くみ子, 中西香織, 川合幸代,
仲田美樹, 原 浩子, 速水 毅,
幸治泰洋, 村田明代, 野中計宏,
中村泰士, 松山博道, 中橋一裕

前回の報告以降現在までの本院での口腔ケアの取り組みについて報告する。

看護師との連携を深めるために、口腔ケアのタイムスケジュールを病棟ケアの時間帯に合わせ、電子カルテの記入方法を工夫し、記載内容の統一を図った。ケア方法の伝達のため、新患においては看護師に同席してもらうようにした。また各病棟での口腔ケアの基本の統一のため、病棟合同にて口腔ケア実技研修会を行ったり、2か月に1回看護部やリハ科と合同で症例発表会や、勉強会を行うことで、口腔ケアへのモチベーションアップに心がけた。義歯の取り扱い、カンジダについて勉強会を行い、義歯装着患者把握のため、義歯マークを作成し、ベッドサイドに掲示した。課題であった口腔ケアラウンドを歯科医師、看護師、言語聴覚士、歯科衛生士にて実施し、新患抽出に役立った。

また地域連携を確実にするため、退院時口腔ケアサマリーを作成した。

これらにより2010年の口腔ケア依頼件数は前年までに比べ大幅に増加し、11月現在で293人となった。

今後の課題としては、癌患者に対する化学療法や、放射線治療時の口腔ケア、周術期における口腔ケア、地域連携にも取り組んでいきたいと考えている。

5. 歯科衛生士学生募集におけるオープンキャンパスの位置づけ

伊勢保健衛生専門学校

○ 萩 則子, 奥山真理, 濱口美香,
前田香代子, 中西康裕

歯科衛生士学校の志願者数は年々減少しており、学生の募集活動が、志願者の確保に重要となっている。その一つであるオープンキャンパスの意義と効果について調査検討し、以下の結果を得た。

- 1) 過去3年間にオープンキャンパスに参加した生徒は111名あり、その中で66名(59.5%)が本校を志願し、61名(55.0%)が入学した。
- 2) 過去3年間の全入学者91名の中でオープンキャンパス参加者は61名で、全体の67%をしめた。
- 3) オープンキャンパスに参加するきっかけは、進路の先生の紹介、進路のポスターを見て、募集要項を見て、の3者で65%をしめ、高等学校への募集活動の重要性が示唆された。
- 4) オープンキャンパス参加者の約60%は入学を前提に参加しており、入学者確保にこの制度の意義は極めて大きい。

6. 教育制度変更後の歯科衛生士教育の方向性と展望

三重県立公衆衛生学院 歯科衛生学科

○ 堀せつ子, エィガン直美, 岡村哲子,
下村真理, 濱口文香

平成22年4月より、歯科衛生士の修業年限が延長されるにあたり、「歯科診療補助業務の現状」と「教育への要望」を調査し、今後の養成方策を検討した。

【対象】

対象者は三重県立公衆衛生学院卒業後1~10年目の歯科衛生士133名であり、直筆式質問形式により回答を得た。

【結果および考察】

教育への要望は「医療人としての教養、義務、責任、専門知識および専門技術」など5項目で

80.7%をしめ、横田らによる「衛生士への要望事項」と一致した。新課程においては、自主的な取り組みを支援するシステムを構築し、意志決定・問題解決を重視した教育編成が望まれている。

また情報収集及び歯周病の診療補助は、80%以上の者が日常業務として実施しており、専門技術と管理能力を兼ね備えた専門職の養成が必要である。

相対的医療行為(保存補綴分野)レベルIIの業務は、教育延長後能力の向上により歯科衛生士に任される分野と考えられるので、学内実習への導入が示唆された。

7. 当院の各病棟看護師における口腔ケアの実態調査

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 河宮和世, 駒田真澄, 渡辺恵美子,
小林 香, 坂口幹子, 奥村健哉

入院患者への専門的口腔ケアを行うにあたり、病棟看護師との連携が必要である。そこで、病棟での看護師による口腔ケアの実態についてアンケート調査を行ったので、その概要を報告した。【対象および方法】対象は病棟の看護師のうち回答が得られた174名で、調査内容は①看護師による口腔ケアの実施状況、②口腔ケアの必要な患者状況、③口腔ケアを必要とするための能力や環境等に関する項目とした。【結果】日常的に口腔ケアを行っている看護師は「いつも」50.3%、「だいたい」25.1%、「時々」15.2%であったが、実施頻度は病棟によりさまざまであった。看護師による口腔ケアが必要と考えている患者は救命救急センター、神経内科、口腔外科、脳神経外科、胸部外科、肝胆膵・乳腺外科、放射線科のある病棟で多いと感じており、疾患や障害は寝たきり、意識障害、挿管中など急性期から慢性期まで幅広く存在していた。口腔ケアが必要と考えられている患者が多い病棟では口腔ケアマニュアルがあり、研修会への参加状況や知識にも影響を与えている傾向があった。【考察】歯科衛生士も研修会などを通じ看護師と情報を共有する必要があると考えている。

8. 当科における過去5年間の外傷患者の動向

山田赤十字病院 歯科口腔外科
○ 中村真之介, 平野吉雄

当院は地域の二次救急病院であり、救命救急態勢の割合が平成22年4月より、当院と近総合病院では5:1となった。当院救急外来の受診件数は年間約1万4千件で、外傷患者も数百件認め、そのうち口腔領域の受傷患者も数名認める。また、直接当科を受診する外傷患者も数名認める。今回、当科における過去5年間の外傷患者を調査したので報告した。

平成17年1月から22年12月までの外傷患者は197例、年平均は39.4例であった。男女比は1.6:1と男性に多く、年齢は9ヶ月~84歳で平均は33.4歳、10歳未満に多く認められた。来院経路は院内他科からの紹介が6割を占め、依頼科は救命救急センター、耳鼻咽喉科の順であった。受傷原因は転倒が最も多く、次に交通事故で、その内、自転車事故が多い傾向にあった。受傷部位は歯牙損傷が多く、次に軟組織外傷であった。顎骨骨折は上顎で歯槽骨に多く、下顎では関節突起部に多く認めた。処置は入院下で施行したものの40例、外来は112例であった。

当科は山田赤十字病院の一診療科として今後も院内および地域の患者や医療機関に貢献していきたいと考える。

9. 3Dプリンタ「Z Printer 450」の概要と臨床応用

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学
○ 岩中義幸, 矢野聖敏, 加藤英治,
奥村健哉, 野村城二

Z Printer 450は3Dモデルを作成する3Dプリンタであり、これまで主に工業系に利用されていたが、今回初めて医療用として当科へ導入されたので、その概要と臨床応用について報告した。
【概要】作成手順は①CTを撮影し、ダイコムデータをコンピュータへ取り込む、②3D画像を構築

する、③不要部分の削除、④再度画像を構築後、Z Printer 450へ出力し、モデルをコーティングして完成され、比較的簡単な手順で3Dモデルを作成することができる。原理は粉末固着積層造形法であり、レジンを含合した石膏により構築される。また、光造形法、堆積積層造形法と比較すると精度は落ちるが、安価で複雑な形状でも比較的速く作製できるといった特徴がある。【臨床応用】顎骨再建手術のシュミレーションや再建用プレートの作製、インプラント埋入術のシュミレーションや患者説明、顎変形症患者への説明や手術のシュミレーション、整形外科や耳鼻科領域の再建手術への応用、学生への教育に利用できる。
【考察】本製品は他の造形法より精度は落ちるものの、ランニングコストがかからず、さまざまな臨床応用が可能であり、さらに学生への教育にも利用できると考えている。

10. 口腔内アフタの三重大学学生での調査

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学
○ 山口晋司, 朝倉那菜, 奥村健哉,
乾眞登可

口腔内アフタは頻度に差はあるものの再発性であることが多い。アフタの発生している期間は食生活が障害されQOLの低下を来しているが、自然治癒傾向が強いため特に治療も無く放置されることが多い。再発性アフタの頻度は欧米で人口の10%内外とされているが、本邦での大規模な調査はない。今回、われわれは三重大学新入生の健康診断の問診票により再発性アフタの調査を行い、若干の知見を得たので報告した。【対象】健康診断時に問診を行った2010年4月の三重大学新入生から1,000人(男性500人, 女性500人)を無作為に抽出した。【問診項目】繰り返す口内炎が出来ますかなど9項目。【結果】1,000人中17人(1.7%)が再発性のアフタを自覚し男性が6人, 女性が11人であった。その内4人が階段を昇ると息切れをするという項目に、2人が食欲がおちているという項目に、4人が寝つきが悪かったり寝ても目が覚めるという項目に重複していた。
【まとめ】男女比は6:11と女性に多く、1.7%

に再発性アフタを認めた。【考察】欧米と比較し、再発性アフタの頻度は少なかった。今後は、再発性アフタの対象年齢層の拡大及び家族歴に対して調査を行ってゆきたい。

11. 上顎前歯部に発生した巨大な骨形成性エプーリスの1例

市立伊勢総合病院 歯科口腔外科

○ 服部雄紀, 木下靖朗, 前多雅仁

今回われわれは、上顎前歯部に発生した巨大な骨形成エプーリスの1例を経験したので報告した。

患者は60歳、男性。約5年前、上顎義歯装着後より上顎前歯部唇側歯肉に腫瘤を自覚するも放置していた。しかし、徐々に増大し、義歯装着が困難となったため来科した。既往歴、家族歴に特記事項はなかった。初診時、上顎左側側切歯および犬歯部を基部とする有茎性胡桃大の腫瘤を認めたが、基部周囲の歯肉に硬結は認めなかった。静脈内鎮静法にてエプーリス切除術を施行した。腫瘤茎部の基部を切離し、骨膜を含めて切除した。切除後の粘膜骨膜欠損部には人工真皮を縫合し手術を終了した。切除物は24×60×35mm、重量は19.2g、断面は黄白色で、充実性であった。病理組織所見では、腫瘤は部分的に糜爛を認める扁平上皮に被覆され、上皮下には線維性組織、炎症性細胞、層板構造を有した骨組織を認めた。術後約1年経過した現在、再発はなく経過良好である。

12. 骨形成性エプーリスの1例

紀南病院組合立紀南病院歯科・口腔外科

○ 平本憲一, 糸川美智子, 南 奏子,
野口 孝

エプーリスは歯肉部に生じた良性の限局性腫瘤に対する総括的な臨床名であり、比較的頻度の高い疾患であるが、骨形成性エプーリスの発生は比較的まれとされている。今回上顎前歯部に発生した骨形成性エプーリスの1例を経験したのでその概要を報告する。【患者】68歳、女性。【主訴】上

顎前歯部歯肉腫瘤。【既往歴】特記事項なし。

【現病歴】4年ほど前に右側上顎側切歯の唇側歯肉に腫瘤の出現を自覚するも放置していた。その後腫瘤は次第に増大したため当科を受診した。

【口腔内所見】両側上顎中切歯部の唇側歯肉に20×14×8mmの弾性硬、無痛性、正常粘膜に被覆された腫瘤を認めた。【X線写真所見】右側上顎側切歯周囲歯槽骨の吸収を認めた。【処置・経過】腫瘍切除術を施行した。骨膜を含めて基部を切除するとともに、右側上顎側切歯の抜歯を同時に行い、歯槽骨整形、および骨面の削除を行った。摘出物は内部に骨様硬組織を含んでいた。病理組織学的には、上皮下に慢性炎症細胞を伴う線維増生がみられ、内部には梁状骨の形成を伴っていた。以上の所見より骨形成性エプーリスと診断された。術後2か月を経過した現在まで再発を認めず経過良好である。

13. 口腔乾燥症に対する塩酸ピロカルピンの効果

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 西浦美貴, 山口晋司, 乾眞登可

口腔乾燥症に対する治療は対症療法が中心で、その有用性は明らかではない。今回、口腔乾燥症の患者の臨床動態および塩酸ピロカルピンの効果について検討を行ったので報告した。対象は2009年から2010年10月までに、口腔乾燥症を主訴に当科を受診し、資料の整った19例で、男女比は1:18とほとんどが女性であったため、以後の検討は女性のみで行った。平均年齢は71.2±11.2歳で、既往歴は高血圧、高脂血症、心疾患などがあった。塩酸ピロカルピン投与前のサクソテストは平均0.22±0.14g/分で、白血球数、ヘモグロビン値、ヘマトクリット値、血清鉄、フェリチン、血清亜鉛、CRP値はいずれも基準値内であった。抗核抗体は17例中5例で、抗SS-A抗体は14例中3例で、抗SS-B抗体は14例中1例で陽性であった。真菌培養は13例で行い、2例で陽性であった。口唇生検は2例で行い、共にシェーグレン症候群との診断を得た。塩酸ピロカルピン投与後唾液分泌量の回帰分析で、1例を除

き17例で唾液分泌量の増加がみられた。また、投与前と投与8週後では、危険率1%で有意差がみられた。副作用は1例で頻尿がみられた。副作用の軽減には、分割投与が有効であるとの報告もあり、今後症例を集め、検討を行う予定である。

14. 静脈内鎮静下に処置を行った症例の臨床統計と考察

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 稲垣俊弘, 永田 心, 清水香澄

当科では、当院麻酔科に依頼して静脈内鎮静下での処置・手術を施行している。昨年からは入院症例に加え、日帰り症例にも応用するようになった。今回われわれは、当科にて静脈内鎮静下に処置を行った症例の臨床統計学的考察を行ったので報告した。【対象】2009年10月から2010年10月までに当科で静脈内鎮静下に手術あるいは処置を行った患者44例。【結果】日帰り症例と入院症例は同数で、平均年齢はそれぞれ47歳、62歳、いずれも女性に多く行われていた。全例、術中に重篤な合併症は認めず、全身麻酔に移行した症例もなかった。入院日数は、4日間以上が11例と最も多かった。手術内容は、腫瘍摘出術15例（日帰り7例、入院8例）、抜歯術11例（日帰り4例、入院7例）、インプラント埋入術8例（埋入本数2本以上、日帰り・入院共に4例）、嚢胞摘出術6例（日帰り・入院共に3例）などであった。日帰り麻酔ではプロポフォール単独使用が12例、プロポフォール、ミダゾラム併用が10例、入院では全例、プロポフォールとミダゾラムを併用していた。既往歴は高血圧、歯科治療恐怖症などであった。【まとめ】安全性の確保と患者負担軽減のため、今後も検討を重ねて行く予定である。

15. 経口ビスフォスフォネート製剤服用患者に認められた咀嚼筋間隙膿瘍の1例

松阪市民病院歯科口腔外科

○ 中村泰士, 松山博道, 中橋一裕

咀嚼筋間隙は、深頸筋膜浅葉が咀嚼筋群を囲む事により形成され悪性腫瘍や炎症性病変の進展経路として重要で、最も多い疾患は菌原性の炎症性病変である。

また、近年ビスフォスフォネート製剤（以下BP製剤）の副作用として顎骨骨髓炎、顎骨壊死（以下BRONJ）が問題となっており、ステロイド薬の使用、糖尿病、喫煙などが危険因子とされている。

今回、われわれは、経口BP製剤及びステロイド服用患者において、咀嚼筋間隙に急速に炎症が波及し、広範囲に膿瘍を形成した1例を経験したので、その概要を報告する。

患者は74歳、女性、左側顔面の腫脹、疼痛、開口障害を主訴に当科受診。既往歴としてANCA関連腎炎にてプレドニゾロン、骨粗鬆症にてアレドロン酸水和物を投与されていた。

初診時、顎骨の炎症所見は乏しいものの、CTにて左側咀嚼筋間隙に広範囲の膿瘍形成を認め、血液検査でもWBC 24600/ml, CRP 16.49 mg/dlと著明な炎症反応を示した。即日入院、抗生剤投与、2度の切開、排膿を行い入院19日目に症状改善し退院となった。

また、今後BRONJに進展する危険性も考えられ、内科主治医に対診し、BP製剤以外の薬剤に変更し、現在、経過観察を行っている。

16. 著明な骨膨隆を来した下顎骨病変の1例

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 加藤英治, 松村佳彦, 野村城二

今回、著明な骨膨隆を来した診断が困難であった下顎骨病変の1例を経験したので、その概要を報告した。【患者】40歳、女性【主訴】右側下顎の腫脹【既往歴】脳性麻痺、知的障害、くも膜下

出血【現病歴】2か月前に同部の腫脹を認め、消退しないため家族に連れられ来科した。【現症】同部の腫脹と下顎の左方偏移がみられ、口腔内では右側下顎3遠心より大白歯部にかけ骨様硬の膨隆を認めた。また、口腔清掃は不良で膨隆直上には残根状態の右下4が存在した。血液検査では、白血球数、CRP、好中球の上昇がみられた。【画像所見】下顎下縁に近接し、一層の透過像により境された境界明瞭なX線透過像と不透過像の混在した像がみられ、下顎管は下方に圧排されていた。

【処置および経過】線維性骨病変の臨床診断の下、全身麻酔下にて右側下顎骨区域切除およびプレート再建術を施行した。病理組織学的には右下4根尖周囲には膿瘍や肉芽形成があり、病変上方では壊死骨と高度の炎症性細胞浸潤がみられたが、病変下部の一部で骨梁形成、線維性結合織の増生を認めた。以上より開花性骨性異形成症あるいは骨形成性線維腫等の線維性骨病変に感染が生じ2次的に慢性硬化性骨髄炎を併発した可能性が高いと考えられた。

17. 高齢者に発生した下顎エナメル上皮腫の1例

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 永田 心, 松村佳彦, 野村城二

エナメル上皮腫は比較的若年者に多く発生し、80歳以上の高齢者に生じることはまれである。今回、82歳男性に発生した下顎エナメル上皮腫の1例を経験したので、その概要と文献的考察を報告した。【症例】82歳、男性【主訴】左側下顎臼歯部歯肉の腫脹。【現病歴】初診より約2週間前、同部歯肉の腫脹を自覚し、近歯科にてX線撮影を行ったところ、同部にX線透過像が認められたため、紹介により当科を受診した。【画像所見】パノラマX線写真にて、左側下顎臼歯部歯槽骨内に境界明瞭で辺縁やや不整な多胞性の透過像を認めた。【臨床診断】左側下顎良性腫瘍【処置および経過】全身麻酔下にて摘出搔爬術を施行した。術後7か月を経過した現在、再発はみられず、経過観察中である。【病理組織診断】濾胞型エナメル上皮腫【文献的考察】我々が渉猟し得

た限り1977年から2010年までに80歳以上での報告は11例あり、最高齢は92歳、男女比は4:7であった。また顎骨中心性のものが6例、周辺性が5例であり、顎骨中心性のものでは、濾胞型が3例、線維形成性が2例、叢状型が1例であった。

18. フッ化物塗布事業実施に至るまでのプロセス

三重県伊勢保健福祉事務所

○ 石濱信之

はじめに：現在、健康づくりは、個人だけではなく、その周囲の人々が形成する環境からのサポートが重要と考えられ、生活習慣・健康状況の改善に至るまでのプロセスに注目していくヘルスプロモーションに基づいている。

今回、伊勢保健福祉事務所管内南伊勢町において、保育所、子育て支援センター、町内歯科医、町保健担当者が協働し、子どもの歯・口の健康について考えフッ化物塗布事業開始に至ったので、そのプロセスについて報告した。

塗布事業開始までのながれ：町保健担当者が子どもの歯・口の健康をもっと良くしたいという強い思いから、町内関係者に理解と協力を求め、保健所歯科医と連携をとりつつ、子どもと子どもを取り巻く環境の把握から、むし歯減少についての目標値とそのための生活習慣目標を関係者協働の場を設定し決めていった。それら実現のための環境作りとしてそれぞれの役割を認識していく中、町行政としてフッ化物塗布の必要性が明らかになり、町内全歯科医により精度管理の重要性を踏まえながらの事業組み立てが実現した。

19. 高齢者での骨折の臨床統計学的検討

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 伊藤佳秀, 朝倉那菜, 乾眞登可

【緒言】近年、高齢化社会の進行に伴い、高齢者が顔面外傷に遭遇する機会が増加すると予想さ

れる。今回、当科を顔面骨折にて受診した65歳以上の高齢者について臨床統計学的検討を行ったので報告する。【対象および方法】2000年8月から2010年7月までの10年間で、上顎・下顎・頬骨骨折にて当科に入院となった65歳以上の高齢者51例を対象とした。検討項目は年齢および性別、受傷原因、受傷から来院までの期間と経緯、骨折部位、合併症、治療法、固定期間、既往の9項目とした。【結果】平均年齢は73.14±5.52歳(65~84歳)で、男女比1.2:1(男性:28例, 女性:23例)であった。受傷原因は、転倒が31例(60.8%)と最も多かった。来院経路は内科からが82%であり、歯科からは18%であった。受傷から来院までの期間は1, 2週間以内が80%であった。骨折部位は関節突起が18例と最も多かった。合併症は顔面損傷が約半数にみられた。処置方法では、圍繞結紮を行った症例は21例あり、多数歯欠損の症例が多かった。固定期間は平均28.52日であった。既往歴は循環器疾患(高血圧18例, 狭心症他11例)が29例と半数以上にみられた。今後、他院との比較を行う予定である。

20. 市立四日市病院歯科口腔外科における顎口腔領域悪性腫瘍の臨床統計 —第二報—

市立四日市病院 歯科口腔外科

○今川直樹, 長谷川正午, 坂野彰人,
木村将士, 町田純一郎, 小牧完二

【緒言】今回われわれは、当科における顎口腔領域の悪性腫瘍患者につき、臨床統計学的検討を行った。2008年に行った報告に続き第2報としてその概要を報告する。

【対象及び方法】2000年1月から2010年3月に初診として受診した悪性腫瘍患者218例を対象とし、性別、年齢、病理組織型につき検討した。さらに当科で加療した口腔扁平上皮癌一次症例については、治療態度、臨床病期分類、主療法、原発部位、および治療成績につき検討した。

【結果】悪性腫瘍患者218例の内訳は、男性139例、女性79例で年齢の中央値は67.5歳。病理組織型は口腔扁平上皮癌が194例(89.0%)を占め

た。口腔扁平上皮癌の治療態度は根治療法が168例、Best Supportive Careが20例、無治療が6例であった。根治療法を用いた症例の臨床病期分類は、I期43例、II期60例、III期28例、IV期37例であり、主療法は手術療法が161例で、原発部位は舌が最も多く、放射線化学療法は7例で原発部位は頬粘膜が多くを占めた。一次治療で手術療法を用いた症例から他因死を除いた148例に対しKaplan-Meier法を用い治療成績を検討した。疾患特異的累積5年生存率は81.1%であり、臨床病期、T分類、N分類、部位別の累積5年生存率において統計学的に有意な差が認められた。

21. 口腔癌即時再建手術における臨床統計学的検討

市立四日市病院 歯科口腔外科

市立四日市病院 形成外科*

○坂野彰人, 長谷川正午, 今川直樹,
町田純一郎, 小牧完二, 山川知巳*,
福島正則*

2000年4月より2010年3月に口腔悪性腫瘍切除に伴う欠損に対し、即時再建を行った33症例の皮弁壊死に関する臨床統計学的検討を行った。

症例は男性22例、女性11例、年齢の中央値は65歳(22~83歳)。原発部位は、舌10例、下顎歯肉17例、頬粘膜1例、口底4例、顎下線1例であった。背景因子として、糖尿病と喫煙、手術因子として、全手術時間、形成外科手術時間、出血量、皮弁採取時間、虚血時間、吻合静脈数について、皮弁壊死との関連を検討した。統計学的検討には χ^2 検定を用い、 $p < 0.05$ を有意水準とした。

有茎皮弁の生着成績は、完全生着が12例(70.6%)、部分壊死が4例(23.5%)、完全壊死が1例(5.9%)であった。有茎皮弁においては、出血量のみが有意な差をもって壊死に寄与した($p = 0.04$)。遊離皮弁の生着成績は、完全生着が11例(68.8%)、部分壊死は4例(25.0%)、完全壊死が1例(6.2%)であった。遊離皮弁においては、糖尿病のみが有意な差をもって壊死に寄与した($p = 0.03$)。

有茎皮弁においては、出血量を少なくするため

の術中の丁寧な止血操作が重要であることが示唆された。遊離皮弁においては、手術前後の糖尿病の周術期管理が重要であることが示唆された。

22. 下顎角下方にみられた多形性腺腫の1例

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 佐藤 忠, 清水香澄, 岩崎佳見,
村田 琢, 田川俊郎

今回、下顎角下方の異所性唾液腺由来と考えられる多形性腺腫の1例を経験したので概要を報告した。【患者】28歳，女性。【主訴】左側下顎角下方の腫瘍。【現病歴】1年6ヶ月前より上記症状を自覚するようになり，改善がみられないため当科初診となった。【現症】左下顎角下方，胸鎖乳突筋前縁に小豆大の腫瘍と同部の軽度圧痛を認めた。【画像所見】CTでは同部に長径10mm大の腫瘍を認めたが，造影効果はみられなかった。

【治療及び経過】その後，著変なく外来にて経過観察していたが，1年後に同腫瘍の増大を認めたため，左側頸部良性腫瘍との診断のもと，全身麻酔下に摘出術を行った。腫瘍は耳下腺・顎下腺とは連続性がなく，薄い被膜に覆われており，15×12mm大，表面平滑で乳白色，弾性硬であった。

【病理組織学的所見】周囲に唾液腺組織がみられ，腫瘍組織内には胞巣状，索状に増殖する上皮構造と，粘液腫様変化を伴う間質組織様構造が混在していた。また，角化を伴う扁平上皮化生もみられた。腫瘍内部にはリンパ節組織は認めなかった。以上より異所性唾液腺組織から生じた多形性腺腫と最終診断した。患者の術後経過は良好で，外来にて経過観察中である。

23. Costello 症候群の一例

独立行政法人国立病院機構

三重中央医療センター歯科口腔外科

○ 柳瀬成章, 鋤崎文子, 下田澄代,
高橋香織

Costello 症候群は，成長・発達障害，特徴的な顔貌，皮膚弛緩，心臓異常，摂食障害などがみられる先天奇形症候群である。今回，我々は乳歯の萌出遅延がみられた本症の1例を経験したので，その概要を報告した。患者：2歳3カ月，男児。主訴：乳歯の萌出遅延と口腔内管理。既往歴：成長障害，過敏性，肥大型心筋症，不整脈があり，Costello 症候群と診断されている。気管支支化症を合併し，気管切開，人工呼吸管理中，また，嚥下障害のため胃瘻造設，栄養管理されていた。現病歴：1歳6カ月頃より臼歯部から乳歯が萌出し始め，口腔管理のため初診となった。現症：下顎は左右Dまで萌出。上顎は右上Dのみが萌出，右上BC，左上CDは萌出途中で，両側AAと左上Bは未萌出だった。口蓋側歯肉の肥厚，高口蓋がみられ，咬合は不可であった。レントゲン所見で，歯牙の欠損は認めなかった。処置および経過：ブラッシングを開始し経過観察を行った。未萌出歯は萌出したが，呼吸不全にて2歳6カ月で永眠した。嚥下障害に伴う食物の逆流，歯肉等の形態異常から，口腔内の衛生状態が悪化しやすく，また，精神発達遅滞により歯科治療が困難な場合があるので，乳児期からの積極的な口腔管理が必要と考えられた。

24. 歯肉に初発した水疱性類天疱瘡の1例

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 中西 康, 松村佳彦, 野村城二

水疱性類天疱瘡は，自己免疫性の水疱性疾患で，口腔粘膜に初発することはまれとされている。今回歯肉粘膜に初発した同疾患の1例を経験したのでその概要を報告した。【患者】42歳，女性。

【現病歴】初診8か月前より，上下顎臼歯部歯肉に水疱の出現，消失を繰り返し，近歯科を受診，処

置にて改善せず当科を紹介受診した。【現症】上顎臼歯部頬側歯肉に水疱，びらんを認めたが，皮膚，眼粘膜には異常はみられなかった。【血液検査所見】抗 BP180NC16a 抗体に陽性を示した。

【病理所見】扁平上皮は基底膜直下で離解，粘膜固有層には慢性炎症細胞の浸潤を伴っており，免疫組織化学染色で，基底膜部に IgG，補体 C3 の沈着を認めた。以上より水疱性類天疱瘡との診断を得た。【処置および経過】皮膚科に対診を行い，皮膚症状が無いことを確認後，アズレン含嗽剤とトリアムシノロンアセトニド軟膏の塗布を開始した。その後，口腔内症状は悪化することなく経過していたが6週間後に皮膚症状が出現したため，プロピオン酸バクロメタゾン軟膏の塗布およびミノサイクリン，フェキソフェナジンの内服投与が行われ，現在のところ口腔内，および皮膚の水疱の発生は減少し，病状の軽快を得ている。

25. 頬部に発生した MALT リンパ腫の1例

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 朝倉那菜，奥村健哉，乾眞登可

粘膜関連リンパ組織 (MALT) とは，消化管，唾液腺，甲状腺，肺などに付属するリンパ組織のことである。今回，我々は頬部腫瘍を疑った MALT リンパ腫の1例を経験したので，報告した。患者は72歳女性，右側頬粘膜の腫瘍を主訴に来科。既往歴にシェーグレン症候群と高血圧症があり，現病歴は平成21年7月頃に右側頬粘膜の腫瘍を自覚し，加療目的に当科受診となった。初診時，左側耳下腺部と右側頬粘膜に境界明瞭で弾性硬，約3cm大の腫瘍を認めた。CTでは右側下顎部に長径2.7cmの腫瘍性病変，両側耳下腺に嚢胞性腫瘍，また左側耳下腺部に石灰化を認めた。MRIでは右側頬粘膜に充実性病変を認め，両側耳下腺に嚢胞性病変が散見された。右側頬粘膜腫瘍及び両側耳下腺嚢胞性病変との臨床診断のもと，全身麻酔下にて摘出術を施行した。両腫瘍断面は充実性，淡黄褐色であり，左側耳下腺部腫瘍に近接して約1mm大の唾石を認めた。病理組織像より extranodal marginal zone B-cell

lymphoma と診断されたため，当院血液内科へ紹介した。

26. 口腔内出血を主訴に来科した急性前骨髄性白血病の一例

榊原温泉病院歯科口腔外科，内科*

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学**

○ 渡邊由裕，乾眞登可**，南 信行*

今回，われわれは歯肉出血を主訴に来科し，内科対診の結果，白血病の診断がなされたが，受診当日の深夜，脳内出血によって不幸な転帰をとった一例を経験したので報告した。

【症例】61歳，男性。【主訴】歯肉出血。【現病歴】初診3日前に大臼歯部の出血を自覚し近歯科を受診。歯周治療を受けたが出血が持続するため当科受診。【現症】全身所見：体格中等度，全身倦怠感，発熱は認めなかった。顔貌は左右対称で他に異常は認めなかった。口腔内所見：右側下顎臼歯部，左側上顎臼歯部歯頸部に持続性の出血および，右頬部に血腫を認めた。末梢血液検査では，白血球数；4500/ μ l，赤血球数；319万/ μ l，ヘモグロビン量；10.5g/dl，ヘマトクリット値；30.9%，血小板数；76000，PT-INR；2.15，LDH；429IUであった。【処置および経過】歯肉出血は持続性であるが少量で，圧迫により一時的に止血した。血液疾患を疑い，当院内科に対診した。結果，急性前骨髄性白血病と診断されたが同日深夜脳出血を起こし，歯肉出血を自覚してから8日後，初診より5日後，死亡した。